

工業高校の英語教育における効果的な評点方法の模索

中西 毅

1 はじめに

学年末テストもおわり、一年間の授業が終わりました。今年度の授業実践を振り返って見て、現時点での生徒たちの学習に向かう様子や姿勢からは、「すべての生徒たちを autonomous learners に導く」という私の教育目標からはまだまだほど遠い現状です。しかし、今年度後半から、寺島メソッドを参考にした授業改革を取り入れ始めてから、生徒を真の学びに導く大きな鍵のひとつに、「成績のつけ方」や「学習評価」があるということがはっきりと見えてきました。

実は今年、本校では、3月も中旬まで、まだ授業が行われています。今年度、台風や気象警報で休校になった補充の意味です。すでに単位認定会議も終わり、生徒の進級（または留年）が、きまってしまった後のまさに「消化試合」的な授業なのですが、たぶん、私は来年度、転任する可能性がほぼゼロであり、今私が担当しているクラスは土木科、化学技術科、創造技術科なのですが、すべて各学年1クラスしかなく、クラス替えがないという状況ですので、すでに来年度の1学期の授業のやりかたと、成績のつけ方を生徒に示し、来年度1学期の授業を始めています。万一、私が転勤したり、事情でそのクラスの担当をもてない場合は平謝りするしかないのですが、すでに、生徒たちは20枚で完走予定の「教科書マラソン」を走り始め、速い生徒はもう12枚目まで到達しています。

この小論では、私が、どういう意図をもって、どんな評点方法でどんな授業をしようとしているかを紹介したいと思います。その中で、高校のいわゆる座学の授業の成績付けで採用されてきた「定期テストの点数 $\times 0. x$ + 平常点」という評点方式や、今、文科省が高校でも本格的な導入をすすめている「パフォーマンス評価」や「観点別評価」などの評価方法に対する批判的考察も交えていきたいと思います。長くなると思いますが、ぜひご一読いただき、みなさんからの「共感」や「批判」をいただけたらと思います。よろしくお願ひします。

2. いま、こんな授業を、こんな成績のつけかたで進めています

授業開きにあたり、以下のプリントを生徒に配布しました。

1学期中間テストまで成績のつけ方

以下の4つはやらないと成績ができません
やりとげれば30点ゲットです！

- 1 教科書マラソンプリント完走[20枚]
 - 2 ダス先生とトーク2回(テーマ1 クラブ(またはバイト)トーク
テーマ2 学校授業トーク)
 - 3 1学期の中間までの英語の授業で学んだこと(のびたこと、授業の不満、感想などなんでもかまいません。原稿用紙半分以上)
 - 4 テーマ作文 原稿用紙1枚以上(以下のテーマからひとつを選んで)
(あ)私とクラブ活動(い)私とバイト(う)学校の授業に対する不満 (え)自由テーマ
- ※ 中間テスト 50点満点
※ 平常点ボーナス 際限なし
ボーナスリーディングマラソン1枚提出につき1点ゲット
ダス先生とのトーク1回ふえるごとに1点ゲット
テーマ作文 200字増えるごとに 1点ゲット
テーマ作文を英訳する 200字分ごとに1点ゲット

また、英語の授業で、私が生徒のみなさんにどんな力をつけてほしいかのプリントも配りました。

英語の授業でつけてほしい力

- 1 初めて見る英語(他の外国語も含む)でも辞書やスマホの力を借りればなんとか意味が取れるという自信
(翻訳ソフトの翻訳が間違っていないか確認できる力もつける)
- 2 自分のいたいことを日本語や英語(や他の外国語)を使って文章で説得力をもってわかりやすく伝える力(映像や写真や音楽などの力の助けを借りるのもOK!)
- 3 言葉が通じない人や考え方が違う人たちとも自分から一歩踏み込んで話を始められる力
- 4 一見難しそうなお壁でも「なんとかなるさ」と前向きに立ち向かえる自信
- 5 わからないときは、周りの人に素直に「教えて」と聞ける力
- 6 「集中力」「持続力」「計画力」
- 7 情報をうのみにせず、「本当にそうか？」と疑える力
- 8 自分や他の人のよい点や成長を、ことばで表現、評価できる力

そして、下図のように、毎回、どの生徒がどこまで達成したかの表を授業のはじめに配布しています。

う説明がありました。しかし、まことに失礼なことを言いますが、その先生が作成したテストは本当にその授業で生徒が学習した内容の到達度を問うものとしてふさわしかったのか、また、そのテストで30点とったということはその授業の学習目標を到達したことになるのかということは、なぜ問題にならないのでしょうか？

もし、高校を「高卒の資格を与える機関」あるいは「就職や上級学校に進学するため生徒の学力を外向けに証明する機関」であるとすれば、国が、各科目で唯一の「単位認定テスト」を作成し、それにもとづいて評点をきめる形でしか不平等は解消できないでしょう。もしかしたら、次期学習指導要領ですべての高校において実施しようとしている「(仮称)到達度テスト」は、学校や地域により生徒の能力がわかりにくいという財界に、もっとわかりやすく公正なものさしを用意するという意図があるのかもしれませんが。

少し話はそれますが、教育学者の刈谷剛彦氏はある著書で「日本の高等教育は学校間の輪切りが明確であるので、財界が労働者を選別する基準は、生徒がどの高校(大学)を卒業したかである程度明らかであり、学校間をとりはらうような絶対的な評価基準やテストは、今まで必要とされてこなかったし、導入されてもこなかった。もし、採用されていたら、高校進学率が9割を超える現状で、高校を卒業できない若者が巷にあふれ、社会不安が増大したであろう」(筆者要約)とかがかれています。これまでのそんな流れから一変し、「(仮称)到達度テスト」の導入や「高校卒業時に英検準2級レベル」という到達レベルを設定する意図は、「新自由主義が要求する選択と集中の原理」における「共通のものさし」づくりでしょう。日本の高校教育の特殊性というものも「規制緩和」「聖域なき構造改革」の中で、配慮がとりのぞかれます。そして、いつのまにかその「共通のものさし」がものさしとして正しいかの議論がどこかにいってしまっていて、達成率や順位などの数字が一人歩きしてしまうのです。小中で実施されている学力テスト、中高生の英検保持者数の都道府県別ランキングなど、全部同じです。だれかが勝手に決めたものさしに基づく背比べの順位が低いとって浮き足立つことより、まず議論すべきは、その基準が正しいものさしかという冷静な判断ではないでしょうか。

話が横道にそれてしまいましたが、担当教員の主観や教育観により、その難易度や出題内容がおおきく異なる各高校の定期テストの客観性や正当性はかなり怪しいものです。そんなものを、進級や卒業といった重要な判断の資料にして大丈夫なのでしょうか。(もちろん、私は絶対的なものさしとして国が統一テストを用意し、高校がそのテスト突破のための予備校と化す学校教育がいいとはいっていません。念のため)。

平常点というのも非常に不透明な成績資料です。これも教科会議でよくでるコメントです。「この生徒は、学力が低く点数は低いが、授業態度はまじめで提出物もだす。だから習得をみとめてあげたい」。逆に、教師に対する態度がよろしくなかったり、教師が指示した提出物をださない生徒は、テストの点数で30点超えていても単位不認定になることもあります。もしかしたらその生徒は、家庭でしっかり学習していて、授業中は授業がたいくつで遊んでいるのかもしれませんが。また一見まじめな生徒の教室での対教師のふる

まいは本性を隠した「仮の姿」である可能性もあります。ある生徒の学習態度を本当につかむには24時間体制で監視するしかありません。平常点は、教師が観察できるところ一場面の生徒のごく1面でしかつけられない非常に不正確なものです。さらに平常点のつけ方を、たとえばノート提出は5点、授業態度は5点などと明らかにしている先生は少ないようです。そういう意味でも、平常点が、一斉型講義式授業をなりたたせるために面白くない話も黙ってまじめに聞くことを生徒におしつける武器となっている面は、大いにあると思います。

担任の先生は、進級が危ない生徒は、三者面談で親も呼び出し「もっとがんばれ！」といます。でもいわれた生徒はいったい何をがんばればいいのか途方にくれるのです。単位認定の基準がものすごく不透明だからです。だからこそ、うちの低学力の生徒たちは「運動部の生徒は、顧問の先生が権力をもっているから留年しない」とか「先生と仲良くなり媚をうれば留年しない」とかいいたします。また、テストの点数さえとればいいので、授業中はほとんど学習に参加せず、三学期の学年末のテストの前に教科担当を回って補習を受け点数をとり、帳尻をあわせようとする生徒がでてくるのです。こんなのは「学習」ではありません。ただの「やっつけ仕事」です。こうやって覚えた知識などすぐに忘れます。生徒に残るのは「やっぱり長いものにまかれるほうが楽や」という気持ちだけです。これでは、情報や権威に対して批判的なものの見方をする態度は養われません。真情報に偽情報がいきまじり、どの情報を信じ、どんな体制を選択すれば地球が「持続可能になるか」を見極めることが一市民の死活問題になっている今、「従順な生徒であれ」というのは「流れにまかせて死ね」といっているのと同じことです。

ここで、私が2年間担当したある生徒が、卒業を前に、私の授業について振り返って語ってくれた「語り」を紹介します。

「ほかの教科の授業は、授業中にバーって先生が説明するだけ。クラスで1-2名の勉強のできる子は先生の話聞いて何が大事かしっかりノートをとって、授業中も覚えるし、テスト前、何を勉強するかわかってるからいい点数とれるけど、僕とか大部分の子たちは、普段の授業はボーっと聞いてるだけで何が大事かもわかれへんし、何も覚えへん。ほんで、テスト前になって何を勉強するかわからんくってあせりまくる。で、そうやって覚えたことはすぐ忘れる。先生のマラソンの授業やったら、写したり、暗記したり、和訳したりするから、授業の中で覚えられる。ほんで、マラソンを完走したら30点くれるっていうシステムやからせなしゃあない。テスト前だけ勉強するんちごて、授業中もしっかり勉強できるから忘れへん。」

平常点や定期テストの点数という不透明な基準よりも、「この授業ではこれこれの課題を課す。これを突破した生徒は合格、突破できなかった生徒は不合格」という基準のほ

うが、生徒は何をがんばればいいのか分かり、毎授業の活動の取り組み度も向上するし、基準として平等だし、いいことばかりだと思うのですが、どうでしょうか？

そして、すべての生徒を30点ラインまでもっていくのは、教員の責任だと思います。寺島先生の『英語にとって評価とは何か』に記載があったように、どのような課題をどこまで出すかは「その集団で一番力がない生徒でも背伸びをすればなんとかぎりぎりやりとげられるライン」に設定しないとイケません。難しすぎても簡単すぎてもだめです。その見極めが「教員の力量」です。そして、そのラインを設定し、生徒に明示した以上は、到達できない生徒は、引きずってでも、呼び出しでも、どれだけ嫌がられてもやらせる覚悟がないといけません。余談ですが、今年度の私の実践でも、授業中にマラソンを完走できない生徒が結構いて、担任の先生にも力を借りながら、全員合格するまで放課後何回も呼び出し補習をしました。（それでも完走仕切れず終わった生徒も若干のこりました。悔しい）。補習は大変でしたが、補習をきっかけに、生徒との距離が近づいたり、生徒が抱える課題の原因がみえてきたり、お互いの信頼関係を築けたりと、とてもいい機会になりました。それはともかく、教員が最低限果たすべき責任を明確にするという意味でも「目に見える形で合格ラインをしめす」ことは本当に有効であると思います。

4. 赤点ライン突破以降の平常点は青天井

今回の私のやり方でいくと「30点を突破した生徒は学びをやめるのでないか？」という懸念が出てくると思います。たしかに今年度の実践でも、「早くマラソンを完走して楽をしたい」という魂胆でマラソンを突っ走り、完走後は宣言どおり休憩時間を満喫する生徒も結構見受けられました。それは早く完走した生徒にボーナス課題を用意しきれていなかったからだだと思います。今回は、きちんと「早く終わった生徒がすぐとりくめるボーナス課題」を準備しておきたいと思います。そして、ゆくゆくは、こちらが用意する課題ではなく、生徒自身がやりたいことを探してとりくめるような形にしたいと思っています。

日ごろの生徒の言動から「彼らは勉強が嫌いで、単位さえとれればそれ以上勉強したいと思うわけがない」と思ってしまいがちです。しかし、彼らは、単位がとれるかどうか関係なしで、本当はもっと勉強したいと思っているし、いろいろなことに意欲的に取り組みたいと思っているのです。以下は、ある1年生の生徒が、かいてくれた「英語の授業でまなんだこと」という作文です。

「僕は最初英語の授業を携帯が触れる楽な授業だと思っていました。なので1学期のころたまにプリントをやってほぼ携帯を触って終えるような感じでした。でもそんな感じだと、他の授業もその癖がでてしまい、2学期の成績はとてもひどいことになっていました。なので、とりあえず英語から頑張ってみようと、授業を少し聞いていると、まったくわからなくて、ほんとにおもしろくなかったです。でもなんとかマラソンとか、課題が出されるようになると、なぜか「他の人よりも速く！」とやる気が少し出ました。

そうなってくるとほんとに少しずつですが、英語の仕組みがわかってきて英語の時間が少しずつ面白くなってきました。すると他の授業もノートをとるようになり、内容もちょっとだけわかるようになってきました。とてもうれしいです。とりあえず今は、2年生にあがれるように学年末にむけてがんばっていきたいです。

この生徒は、2回目の1年生です。昨年は、不登校傾向で欠課オーバーとなり進級ができませんでした。この生徒が英語の授業でマラソン方式をとりいれてから自分にどんな良い変化が起こったかを自分のことばでしっかり伝えてくれています。彼の作文から伝わるのは、成績が振るわない生徒の大きな原因は「勉強がわからない自信のなさ」であることです。だからこそ、何かの機会を得て「僕にもわかるんや！」という自信を取り戻すと、どんどん欲がでてくるのです。彼にとってその機会は「マラソンの完走」でした。そして、英語の授業で回復した自信を英語の授業以外でも発揮しようとしています。だからこそ、この30点ラインをどこにするかが教員の腕のみせどころなのです。やりとげたとききちんと「達成感」がもて、「自信を回復できる」絶妙のタスクを用意しなければいけないのです。

一度自信を回復した生徒は、30点ラインなど関係なく、どんどん走り出すのではないかという楽観的な見通しが今の私にはあります。そして、単位習得には関係ないけど自主的に前に出した一歩こそ、中学校から彼らを苦しめてきた、進学や進級のため仕方なしにやらされてきた「勉強」が「真の意味の学習」に昇華する瞬間です。この一歩こそ、見逃さず教員がほめて価値付ける一歩なのです。だからこそ、30点ライン突破後のボーナス点は「青天井」にしています。走りまくれば、制度上は、定期テストをうけるまえに100点に到達することも可能です。

ここで「到達目標を明らかにした評価」について触れたいと思います。最近、英語教育では、到達点を明らかにした評価や指導が大流行りです。今年度、和歌山県で実施された英語教員向け官制研修シリーズで顧問講師をしてくださった関西外大の中嶋洋一先生も「人間には到着点を常に意識して行動できる”山型人間”と、足元しか見えず流れに任せてうろろろするだけの”川型人間”の2種類ある。みなさんは英語学習の到達点をしっかり意識し、どうやったら生徒を”山”にたどりつけさせるか、そのためにどんな足場かけを用意すればいいかをしっかり見極めた”山型授業”をめざしなさい。」とおっしゃっておられました。いわゆるバックワードデザインです。

でも私は、このトレンドに、ずっと違和感をもっていました。到達点を先に示す指導法は、一人ひとりの生徒を見ていません。その到達点は、目の前の生徒を深く観察せずとも、いえその存在を無視してでも、教員が勝手に設置できます。そしてその到達点のてっぺんから、教員は絶対的存在となって生徒を見下ろし「ここまでおいで」をしています。基本的に「目標準拠評価」は、減点法です。常に生徒はたどり着く目標から見て「未完成」とみなされ、何が足りないかを指摘される存在です。

思想家の内田樹さんは、著書の中で「教員や師が「到達点」になったり、到達点を決めたりするのではなく、教員や師が「わしは、まだまだじゃ、どうやったらあの人（または物事の本質）に近づけるんじゃないだろう。」と遠い目をするだけでいい」という意味のことをかかれています。リストアップやデザインするというのは、悪く言うと、目標点までの近道のランドマークをつけること。言い換えれば、（これも内田さんがよく書かれていることですが）最小限の努力で最大限の利益を得ようとする「商売勘定」に毒された考え方なのかも知れません。（ちなみに、張良が得た「極意」は、「わからないときは人に聞く」という極意でした。なぜ2回も靴を落としたのかが、わからないなら師に問えばよいという極意です。「学ぶ力」の1番は「人に聞ける力」というのは、マラソン方式を取り入れた授業で、わからない問題にぶつかったとき、生徒がどう対応するかをみればすごくよくわかります。ごく自然に周りのクラスメートに聞ける人と、誰にも相談できず固まってしまう生徒がいます。変なプライドをすてて、人に聞いたり人のプリントを写せる生徒のほうが、学習能力やサバイバル能力は格段に高いでしょう）。

平常点を青天井にするのは、目標準拠評価に対する私の反論です。「教員が神的存在となって、生徒の目標を勝手に決めて、高みから見下ろす」ことで導かれた生徒の到達点など、たかが知れています。生徒が単位習得や、将来のためといった自分にとっての損得を考えず、ただ成長したい、もっといろんなことをしりたいという気持ちだけでふみ出したその一步を後ろから拍手喝采で褒め讃える、そんな教員になりたいです。

30点ラインはゴールではないのです。スタートです。本当の学習は、何とか突破したデッドラインの向こう側にはるかかなたまで広がっています。30点ラインは、そのジャンプへの踏み台です。

5. 定期テストの位置づけの見直し

高校においては、普通、学年の成績は、1学期2学期3学期それぞれの成績を平均して出します。私も今年度まではそうやって成績をつけてきました。しかし、ふとそのつけ方の不合理さに気づいてしまいました。

生徒たちは、学習を深めれば、1学期終了時点よりも2学期終了時点、2学期終了時点よりも3学期終了時点のほうが学習の習熟度は上がっているはずですが。理科や社会など、学習項目がある程度わかる形で分類でき、各学期であつかう内容が違う場合はまだわかるのですが、英語であれば、各学期の学習の習熟到達度は、途中経過でしかなく、それを3で割っても、1年間でどんな力がついたかの目安にはならないのではないのでしょうか。

それと、工業高校の特徴的な問題点として、3年生がほぼ全員、10月の時点で進路が決定し、10月以降の授業に対する取り組みが1学期の必死さとは手のひらを返したように急激に悪化してしまうことがあげられます。今のやり方でいくと、たとえば、1学期に90点を取った生徒は、2学期3学期は何もしなくても1年間の単位習得はできる計算になります。今回からは、それらの矛盾点をなんとか解決したいと思いました。

そこで、学年の成績の出し方に関しては、全員に課す「赤点突破課題」は、各タームすべて必ず突破しないといけないという縛りをつけることにしました。そして、学年の成績をつける際には、まず30点を与え、それから、ボーナス点に関しては、各タームの点数を5で割った平均を出し、50点満点の定期テストに関しては「5回の定期テストの中で一番成績のよかった点数を採用する」ことにして、この3つの和を100点満点でつけようと思っています。そしてできれば、最後の学年末テストで各生徒が最高得点をとれるようにもっていきたいと考えています。（ただ、1年生で、自分の学力にもすごいコンプレックスをもつ低学力の生徒が多いクラスに関しては、1学期の中間テストはかなり高得点をとってもらえるような問題にし、自信を回復させるのも大事なので、そこはまだ考えています）。

まだ、しっかり構想が固まってないのですが、テストを①そのタームで学習したことを重点的に問うコーナーと②1年間通してどんな力がついたかを問うコーナーの2分でできなかと考えています。たとえば、今タームの授業は「教科書の本文の和訳を通して英語の語の並べ方のパターンを身に着ける」ことをねらっているので、次の中間テストには①授業でとりあげた本文を単語のヒントなし、記号なしの白文で出す問題②単語のヒントもすべて与えた記号付けされた初見の文章の内容把握の問題③日本語と英語の統語ルールについて日本語で記述させる問題④自由英作文などを出題しようと考えています。1ターム以降は、それぞれのタームの重点目標に応じて、①や③は変わっていきますが、②④の部分は、各5回の定期テストでほぼ同レベルの問題を用意し、そこで生徒が自分の成長を感じてもらえるようにできたらと考えています。そうやって「最後のテストで最高点をとる」ということが実現できたらいいのですが、初めての試みでうまくいくかどうか。一度挑戦してみます。

定期テストに関して、もう1点注意すべきことは、先日の和歌山での講演で、寺島先生から、「適切な前置詞を選ばせるなど、幹ではなく枝を問うような問題は定期テストの問題にはふさわしくない」というアドバイスです。寺島先生の受け売りで申し訳ないですが、「転移しない学力は真の学力ではない」のです。細かい文法項目や熟語をどれだけ覚えたかなどを問う重箱の隅をつつくような問題は極力避け、「センマルセン」、「ヘッドは句や節の先頭に来る」など英語特有の統語構造、リズムの等時性、表現読みなど「これからの英語学習の道しるべ」になりうる「幹」の部分をしっかり問う問題づくりを心がけたいと思います。定期テストにどんな問題を出すかは、生徒に「英語教育において何が幹か」を伝えるメッセージであるにとらえなければいけません。

後で述べますが、「学習評価の最終目標は自己評価」という立場から言えば、定期テストの点数を、検定試験や入試と同じ様な扱いで、「この生徒はこれだけの力をもっています」という「外に向けた値札」に使うのは、おかしいです。あくまで定期テストは、本来の目的である、「生徒が自分にどれだけ力がついたかを試すため」、そして「教員が自分のやりかたの問題点を明らかにするためにある」という位置づけから逸脱しないよう、生

徒に対しても、しつこいくらい伝え続けたいと思います。生徒の評点というものは、個人情報であり、本来的には外に出すべきものではないのです。(遠山啓『競争原理を超えて』)。どんな人材を採用するか、どんな生徒を入学させるかの判断は、受け入れ側の責任であるべきです。

6. 目に見えないものは点数化するべきではない

さて、先述した目標別評価とともに、今の教育界における教育評価のトレンドになっているのは「観点別評価」でしょう。これまでペーパーテストの点数だけで生徒の学習を捕らえようとしていたものを、生徒の状況や到達度を、いくつかの観点別に細分化されたルーブリックを使って、見える形にして評価する。そして、各観点でABCなど段階をつけ、Aが3つなら80点などと点数化する方法です。すでに中学校では、この方法が採用され久しいです。そして、これも今流行の「パフォーマンス評価」や「ポートフォリオ評価」のものさしとしてこの「ルーブリック評価」が適しているといわれています。たしかにこの評価方法では、従来のペーパーテストだけで測れなかった見えない力を見える形で明らかにしているように見えます。ただ、私はこの流れにも大きな違和感があります。すこし考えれば、その設定された有限個の観点でわけられたルーブリックは、そこにあるものを少しも正確に写せないことは明白です。なぜかという、人間の成長や特徴を捉える観点は、無限にあるからです。

最近では、目に見えないものを見えないままにほうっておかないで、なんでもかんでも可視化しようとしているようです。一例をあげます。教育公務員特例法の改正に伴い、国の指導で、各都道府県が、どんな教師をどう育成するかという「育成指標」というものを作成しているようです。和歌山県は、全国に先立ってすでに完成したようで、先日、その案を組合の会議で見ました。びっくり仰天でした。教員生活を基礎形成期→伸張期→充実期→貢献期の4つにわけ、それを横軸に、授業実践力、生徒指導力、マネジメント力を縦軸にマトリックス化し、各ステージでどのような力がついているべきかという表でした。いい教師になるのに、表であらわせるような近道があるのなら、もっと事前に教えてほしかったです。(もちろん皮肉ですよ)。そんなものがないことは、ちょっと考えればわかるはずですよ。

各校の英語科で作成するよう指導されているCan Do Listも同じです。言語習得を「この段階ではこれができるようになった」とリストアップするのは不可能です。そのためには、言語の全体像を網羅できるという前提がいります。チョムスキーの生成文法や、There is a holeの歌を見れば一目瞭然のように、私たちが日々出会うことばは、ほとんどが「生まれて初めて聞く文」であり「長くしようと思えばいくらでも長くできる」しろものですので、ことばの全体像を網羅することは不可能です。しかも、変数が多すぎます。たとえばNHKの基礎英語の3月のCan Do Listは「身近な人や物について説明できる」となっています。「身近」とは、環境や職業や地域によってまったく違います。説明する相手も、

目上の人か、対等なのか、ネイティブの人に説明するのによりコミュニケーション成り立ちの困難さはまったく違います。他にも声の大きさや、その場所の音響など、コミュニケーションが成り立つ難易度について考慮すべき変数は無限なのです。そのように、リストや観点は正確にしようとするほどミクロになり、もしそれができたとしても、ものすごく限定されたときに発揮できる能力やごく狭い観点でのよしあししか証明できなくなります。

考えてみれば、教育界では、目に見えないものを切り刻んで見やすくしようとして、うまくいっていないことばかりです。言語能力を「聞く、読む、書く、話す」の4技能に（次期指導要領では「話す」を「やりとり」と「発表」にわけて5技能になるそうですが）、生徒の学習を4観点（これも次期指導要領では①知識・技能②思考・判断・表現③主体的に学習に取り組む態度の3観点になるそうですが）にわけて、何か格別いいことがあったのでしょうか？確かに、スポーツで、フィギアスケートや体操などの採点競技は、いろいろな観点を用意し、それぞれの合計点で競われます。それは「順位をつけるのが前提」だからです。順位をつける必要がなければ、そのようなループリックは必要ありません。

『英語にとって「評価」とは何か？』にあるように目に見えない「意欲」や「作品の質」に点数をつけることは絶望しかうまないので。それらは点数にしなくても、たとえば、発表後のオーディエンスのリアクションをみれば十分です。はじめから与えられた限られた観点を図式化して評価するよりも大事なものは、無限の観点で言葉で評価する力を養うことです。これについては次節で詳しく述べたいと思います。

7. 最終目標はことばによる自己評価

私の教育理念の原点は、元宮城教育大学学長、教育学者の林竹二です。教員になりたてのころ、むさぼり読んだ彼の著書に出ていたいくつかの彼のことが、今でも私の柱になっています。その中でも、「生命に対する畏敬の念のないところに教育はない」と「学んだことの唯一の証は変わったことだ」の2つは、座右の銘です。

今の教育評価のトレンドである「目標準拠評価」に対する私の違和感の最大の理由が、一人ひとりの生徒が、かけがえのない畏敬すべき生命であるという大前提を脇に置き、十把一絡げの「もの」扱いにし、勝手に目標を決め、こう指導したらこう育つだろうと上から見下ろしている目線です。生徒は一人ひとりちがいます。一人ひとりが違う環境で育ち、違う物語をもち、まったく違う場所から学びをスタートし、同じ授業や学習をしても、どこに到達し、どんな変化がおこったのかもまったく違います。しかも、彼らのもつ可能性や潜在能力がいつ何をきっかけに発芽するかは予測不可能です。点数主義を否定して、いくつかの観点をもとにループリックで見える化したとしても、一人ひとりの生徒の変化や成長の全体像を明らかにすることはまず不可能でしょう。（同じことは対教員についてもいえます。国が、指導要領や教員育成指標などという形で何を教えるべきかのリストやど

ういう教師になるべきかのハウツーを与えないと、教員は成長できないと思っているのでしょうか。これこそ生命に対する畏敬の念の欠如であり、教員の家畜化です）。

結局、ある学びを通じてその人がどうか変わったかは本人にしかわからないということです。そして、「あなたはこの学びでどんな力がつきましたか？」と聞かれたときに、本人が、自分のことばで説明するのが一番信頼できる評価材料になるということです。もちろん、本人にもみえない部分は多々あります。ですので、テストや周りの人からの評価を参考にします。そして、最終評価は、本人が下すしかないので。周りの人が、確実に評価できるのは、「この人は何をどれだけしたか」だけです。

よく考えたら自己評価だけにとどまらず「あるものを正しく評価し、その根拠を自分の言葉で語れる力を伸ばす」というのは、教育の最大の目標なのではないでしょうか。そのためには、はば広い観点から、正しくものごとを見極める能力と、その根拠を支える知識と、なぜそうなのかを説得力をもって相手にわかりやすく説明できる能力がいます。その3つが集約するのは「書く力」です。「計画力・持続力・集中力」同様、「書く力」も、すべての学習に必要な「見えない学力」なのではないでしょうか。そのすこしでも足しになるように、私は、赤点ラインの最低タスクに「日本語によるテーマ作文」を入れています。私は、ほとんどの生徒が、本校での学習が学校教育の最終の場となる本校の生徒には、大学と同様、最後に卒業論文を書かせるシステムが作れないか、真剣に考えています。高校での学習、特に工業高校での各教科の学習は、あまりにばらばらです。各教科で学んだことを集約するようひとつのテーマを設定して、最後に論文を書かせられたらいいのにといつも思っています。

話がそれましたが、私が授業で生徒たちに自己評価の力をつけるためにやってもらっているのは、①毎日の授業後にかいてもらう「振り返りシート」②ターム末に提出してもらった作文「このタームの英語の授業で学んだこと」そして、来年度、新しく取り組もうとしている③「ポートフォリオ評価」です。

まず、①ですが、毎日授業後にならず、各生徒が今日何をしたか、今日どんなことを学んだかなどを振り返って書いてもらう振り返りシートを用意しています。そして、毎回、私からもその授業の生徒の学びを「がんばってたな」や「今日は休憩？」などのコメントをつけて返します。生徒の自己評価力を高めるだけではなく、生徒との信頼関係づくりや、「先生が、みてくれているからがんばろ」という動機付けのためにも非常に有効です。私にとっても、授業が終わった後、その時間の一人ひとりの学びを思い出す時間が持て、しっかり反省や分析ができます。（実は、和訳マラソン時は、振り返りシートを授業のはじめに該当生徒に返す時間もつけないのです。それで、最近は、4人程度のチームをつくり、そのチームごとに封筒を作って、授業のはじめに各チームの代表の人に封筒を渡し、配布してもらい、最後に回収してもらって出すというやり方をしています。そうすればそれほど時間もかかりません）。

②は、そのタームで学んだこと、自分がどう変わったか、授業に対する不満などを書く

日本語の作文です。佐藤学氏らとともに「学びの共同体」づくりにかかわっている東京大学の秋田喜代美氏は、著書の中で、“appropriation”という概念を提起しています。これは「もともと自分の外側にあった新しい概念や知見が、自分の言葉で自分の中に取り込まれること」をさすそうです。先ほどあげた林竹二の「学んだことの唯一の証は変わったこと」とあわせて考えると、「学びが成立するというのは、新しい知見が自分の中に入り何かが変わり、その変化を言語化できること」となります。（ちなみに、和歌山大学に英国の庭園を研究されている英文学の教授がいて、彼によると庭園学における appropriation とは、「隣の家を自分の家の庭園の景色の一部として取り込む」行為をさすそうです。面白いですね）。この「学習の中で自分の中に起こった変化を言語化すること」を大正時代から追及し続けている学校を、私はひとつ知っています。それは、奈良女子大学附属小学校です。たまたま、和歌山大学の英語教育に、その小学校で英語教員をされていた先生がおられて、その先生の話を書き、見学にいかせてもらいました。そこの授業は、衝撃的でした。

私は、小学4年生の算数の時間を参観しました。その授業の目的は「平方メートルよりも大きな面積の学習の導入」でした。授業の司会進行は、児童が行っていました。はじめに、「南北2Km、東西4Kmの長方形の形をした土地の面積を求める」という本時の学習のめあてを確認しました。それから、個人で考える時間が与えられたのち、一人一人が「平方メートルの時の考え方と同じように考えたい」「1平方メートルの四角がいくつあるかで考えたい」など、その問題をどうやって解くかの個人のめあてを発表しあいました。それから再び個人で考える時間が与えられ、個人で問題を解く方法を考えていました。その後、また、集団学習にもどり、それぞれの考えを発表しあいわからないところは質問をしあって確認していました。そして、最後に、今日の学習で自分がまなんだことや、他の生徒の話を書き自分の考えがどう変わったことなどを自分のことばで、ノートに記入し、それを発表しあって授業がおわりました。

この小学校の狙いは明らかです。教師や優等生の解説を言葉尻だけ暗記して理解しても何も残りません。まずは、まちがっていてもいいから自分の観点で解決法を考えさせる時間を保証し、その後、さまざまな観点を交流しあうことにより、当初の自分の解決法をどんどん改良していき、他人の言葉でなく、自分の言葉ですつと自分のなかに新しい知見や解放がとりこまれることを狙っているのでしょう。学習そのものだけでなく「学び方」も同時に身につけさせている教育方法といえます。そして、集団で意見をいいあってさまざまな観点を身につける時間と、静かに個人で考えを深める個別学習の時間が意図的にわけられているのも大きな特徴です。考えてみれば当たり前です。すべての学習は、「学びたい」という個人の要求から始まり、何を学んだかを個人でふりかえることで終わります。

私が生徒にそのタームで学習したことを自分のことばで振り返る作文を書かせる取り組みの歴史は、奈良女子大学附属小学校の100年を超える歴史と比べたらまだまだ浅いです。なので、今回は「原稿用紙半分」という控えめなデッドラインにしています。しかし、

自己評価力を向上させる意味でも、学んだことをより深く自分のなかに取り込むという意味でも、学び方を学ぶという意味でも、このタスクはとても大切なタスクだと思います。改良を深め、生徒にとって取り組みやすくしかも意味のある与え方をまだまだ探っていきたいと思っています。そして、可能な限り、全員のふりかえり作文を印刷して全員に配布したいとおもっています。ものごとを、正しく見定めるのに必要な無限の観点。かけがえない個性が影響しあう中で、それを身につけることこそが、学校で集団学習する醍醐味といえるでしょう。

話がすこし広がってしまいましたが、最後の③ポートフォリオ評価です。今までに実践で一度もやった事はありませんが、今回はじめて導入しようとたくらんでいます。年度初め、生徒にまっさらなノートをわたし、そこに自分が書いた作文、振り返り用紙、授業で配布したプリントや授業中の様子がわかる写真などをはりつけるなどして、1年間の自分の学習の経緯が他の人にもよく伝わる「アルバム」を作ってもらおうと思っています。そしてそのアルバムを、各学期末、会議室などに並べて、クラスメートだけでなく、他クラスの人や先生方、保護者にもみてもらおうと思っています。そして、コメント欄を用意して気づいたことをどんどんかきこんでもらおうとおもっています。ノートにはれないもの、たとえば音声やFLTの先生とのトーク、自分たちで作ったビデオなども、上映しようと思っています。もちろん、この際もポートフォリオの質は点数にしません。何ページ以上を最低ラインとして全員出させ、あとは量が多ければボーナスという、作文と同じ方式で点数化しようと思っています。本来は、自分がどんなプロセスでここまできたのかを自分で振り返るためのポートフォリオですが、せっかくなので人にも見てもらいたいと思っています。

ここまで「評価の最終目標は自己評価」であるということについて考察してきました。ただ、忘れてはいけない大事なことがひとつあります。それは、人がいい学びやパフォーマンスをするには、外からの心温まるリアクションが不可欠だということです。自分のやったことに対して、「賞賛」や「暖かい批判」や「書評」や「コメント」や「いいね」がつくことが、大きな動機付けになることはいままでもないことです。ですので、自己評価力をつけると同時に、他の人をやる気にさせ、奮起させ、ベストのパフォーマンスを引き出せあえるような、効果的でお互いが気持ちよく励ましあえる力を育成することも、月並みな言い方ですが、この社会をよりよいものにするためには必要だと思います。ですので、けなしあうためではなく、励ましあうという意味での相互評価の機会はどんどん入れていこうと思っています。

7. インタビューテストはテストにすべきではない

「赤点突破ライン」の一つに「ダストーク」というものがあります。これは、「FLTのダス先生と与えられたテーマに基づいて一定時間トークする」というタスクです。一種

のインタビューテストですが、いわゆる一般のインタビューテストとは、大きく違います。「教科書マラソン」や「歌の暗記テスト」などと並行して実施しています。

普通、インタビューテストは、英検の2次試験のように、密室で、試験官と被試験者のみで行われ、被試験者は、辞書やスマートフォンなどはもちこめません。そして、「きちんと答えられたか」「何語使用したか」など用意された評価基準をもとに点数付けされます。私もかつては、そのようなインタビューテストを実施していました。今は、まったく違う方式で行っています。

今のインタビューテストのやり方を説明します。生徒には、トークのテーマを知らせ、そのトークでFLTの先生が聞く質問のリストを配布します。そのプリントに自分の答えを書きこんでもっていてもかまいません。用意ができた生徒から順にFLTの先生のところいき、トークします。お互いが通じ合わないときは、スマートフォンを使用することも禁じていません。教室のオープンスペースで行い、クラスメートに相談したり、助けてもらうのもありにしています。終わったら、トークの様子を振り返る振り返り用紙にFLTの先生に終了証明のサインをもらい、会話の振り返りを記入し、それを提出して終わりです。

インタビューテストをテスト方式にしなくなった理由は2つあります。一つ目は、英語に対して大きな劣等感をもっている生徒が、「テストをうければ2点」という「えさ」を用意しても、テストを受けようとしなないという事実です。それほど、生徒は自分の英語力や発音にコンプレックスをもっていて、インタビューテストの場で、FLTの先生が話す英語がわからなかったり、自分のいいたいことが英語でいえなかったりして自尊心が傷つくことが耐えられないのです。「テスト」というやり方や名称は、彼らに無意味な情意フィルターをかけてしまいます。もうひとつは、インタビューテストで設定された言語場面は実際のコミュニケーションの場からはかけ離れているということに気づいたからです。実際の生活において、言葉が通じないもの同士、なんとか意思疎通を図ろうとするなら、普通は、どんな手段をつかってでも何とか伝え合おうとします。丸腰で1対1でしかも密室でコミュニケーションを取り合うというシチュエーションは現実世界ではほとんどないのではないのでしょうか。

この方式に移行する中で気づいたことですが、コミュニケーション能力とは、近所の人と機嫌よく世間話ができることではないということです。言語や考え方がちがう「断絶した相手」に一步踏み出してこちらからやり取りをはじめめる勇気。それが真のコミュニケーション能力なのではないのでしょうか。そのため、名前をよばれてからいくのではなく、自分からFLTの先生のところに行く方式にしています。そして、今のFLTの先生はほとんど日本語が話せないのも、もし「断絶」が生じたときはお互いがなんとか歩み寄らないといけません。このテストは、「断絶のときどうあがけるか」の力の育成を狙っています。さらに「生徒が何か話したいものを持参している」シチュエーションを大事にしています。「話したいこと」をもっていないと「トーク」は成立しません。英検のように、FLTが

写真やイラストを用意するのではなく、生徒が見てほしい写真をもっていく形を採用したいです。ゆくゆくは、「質問リスト」は配布せず、テーマだけ、あるいはテーマさえもなしで本当に自由にトークする形態にしようと考えています。そしてこのトークは、赤点突破ラインでは2回ですが、もし希望すればそれ以降もボーナス課題として何回でもチャレンジできます。そんなトークを重ねることで、生徒たちが「違う言語や考え方という壁を乗り越えて自分から関係をスタートする積極性」や、「もっと英語が話せるようになりたいという動機付け」や「英語の上達を自覚できるチャンス」にしてくれればなと思っています。

実は、FLTの先生に、どう授業に入ってもらうかは実は結構難しい問題なのです。何をするか「ネタ」を考えないといけないし、事前に打ち合わせをしないといけないし、結構めんどくさいので、英語科の教員の誰の授業にFLTの先生にきてもらうかは、実はおしつけあいになっていたりします。「インタビューテスト」は、その悩みの解決にもなるのです。今は、私は、FLTの先生には、可能な限り毎回授業にきてもらって、このインタビューテストをしていただくのが、FLTの先生にとっても、生徒にとってもベストなのかなと思っています。何より、生徒がFLTの先生と親しくなることで、英語をもっと学びたいという動機付けになってくれたらというのが大きな狙いです。

最近の研究授業では、日本人の生徒同士が英語で会話する活動をよく見かけます。私も、一時、授業のはじめの帯活動として、生徒同士の英語のやりとりを取り入れたことがありました。しかし長続きはしませんでした。はじめはものめずらしいからか、生徒たちも、英語でいきいきと会話をしていましたが、すぐにあきました。それは「英語で伝える必然性」がないからです。本当に知りたいことは日本語で聞くでしょう。生徒に「英語を学びたい」という強い動機があれば別ですが、日本人同士が英語で会話するタスクは、「ごっこ遊び」におわることを痛感しました。FLTの先生とのトークを毎時間開店しておくほうが、よっぽど効果があると思います。

9. 最低ラインをしめした活動型授業でスマホのアプリに打ち勝つ

主体的で対話的で深い学びを導く「アクティブ・ラーニング」の導入が口うるさく叫ばれていますが、文部科学省にいわれなくてもこれまでの「一斉型講義式授業」が、まったく成り立たないことは、私には十分すぎるくらいわかります。もし、私が「一斉型講義式授業」スタイルで授業をし、何も注意しなかったら、生徒たちはスマートフォンのゲームアプリをずっとやっています。大学進学を希望していない生徒たちにとって、「いつか役に立つ」と授業で教員が前で必死に話している情報を我慢して聞いているよりも、自分の思うとおりに動いてくれて、一人だけではなく、通信機能を使って友人と協同したり競争したりまでできる手のひらの「魔法の箱」のゲームアプリをやっているほうがよっぽど意味があり楽しいことなのです。教員が教壇から面白おかしいことをいって、一部の活発な生徒が、それに反応している授業もたまにはできます。しかし、生徒たちの注意を引くのは

一瞬です。生徒たちはすぐ「魔法の箱」にもどります。さらに、発言をしない、それ以外のおとなしい生徒の中では何も起こっていません。それは、授業中のスマートフォンの使用を禁じようが禁じまいが同じことです。

それにもかかわらず、いまだに、うちの学校のほとんどの先生方が、この一斉型講義式授業スタイルを踏襲しているのは逆に驚きです。先生方は、私にはもっていない「スマホのゲームアプリに打ち勝ち、40人の生徒を50分間学びに向かわせる魔術や話術やオーラ」を持っているのでしょうか？あれば教えてほしいです。

高校教育現場で、一斉型講義式授業スタイルからなかなか抜け出せないのは「教科書にあることをすべて教えるのは教員の義務」「教えたことは生徒にすべて伝わる」「伝わらないのは聞くほうの生徒のせい」などという思い込みがあるからかなと思います。「伝える」と「伝わる」は、一字違いですが、大違いです。大事なものは、聞くほうに聞く理由があるかどうかです。

内田樹さんの『日本辺境論』を読みました。内田さんは、学びのモデルとして、漢の劉邦のもと名軍師として活躍した張良の故事をのせています。張良が師と見込んだ黄石公という人は彼に何も教えようとしません。ある時黄さんは靴を落とします。そしてまた別の日もう一度靴を落とします。それを見た張良は、やおら極意を得たという故事です。多分、黄さんはたまたま靴を落としただけでしょう。しかし、何かを学ぼうと研ぎ澄まされた張良は師の「ゼロメッセージ」からも深い学びが出来るのです。内田さんは、日本人の学びの特徴として「機」というものを提起されています。「機」は「機会」の「機」。「機」というのは、相手に自分の名前が呼ばれたとき、準備なしで、即時に「はい」と答えられること。そのためには常に自分を意識しすぎて「隙」を作ったり、「敵」を意識してはいけません。準備をしていたり、相手を受けているのでは遅すぎて、先に斬られてしまいます。内田さんのようにわかりやすく説明できなくてもどかしいですが、辺境人という劣等感から逃れられない日本人が、「自分は世界から遅れている」というハンディを乗り越えて、何かあったとき要求される即時に対応する瞬発力、それが「機」と私は解釈しました。そして、教育の場という「機」は「動機」でしょう。先日の和歌山の講演で寺島先生が幾度も強調されていたように教育で一番大切なのは「動機づけ」です。いくらこちらが「これは大事だから覚えなさい」などとこれみよがしに靴を落とし続けても、生徒側に「機」がなければ何も起こりません。

では、生徒に「機」を起こさせるにはどうすればいいのでしょうか？簡単に出る答えではありませんが、寺島メソッドを半年間やってたどり着いた答えは、『英語にとって「評価」とは何か』で、寺島先生がかかかれているように「努力すれば達成でき、しかもやれば確実に英語の力がつくタスクを与え、達成感と自分の成長の実感」をもたせることしか思いつきません。それは、一斉型講義式授業スタイルでは不可能です。

ここで、中学校時代の英語の授業の様子をかいてくれた1年生の生徒の作文を紹介しませ

高校に入って早くも1年が過ぎようとしている中、「高校に入って変わったな」と思うことが3つあります。1つ目としては当たり前ののですが、工業に関する授業が増えました。私としてはうれしい限りです。2つ目として中学のときより生活が充実している。3つ目として英語の授業の質が変わった。というところでしょうか。3つ目の意見に関しては本当にそうだと実感しています。なぜなら、かつかつになるまで勉強しなくても、自分のペースでも十分に英語が理解できているからです。中学生の英語などは、文法と単語が命であり、もしもテストまでにそれらを習得できなければ、点数に大きく影響するというオソロシイものでした。授業だって、先生が黒板で訳をかき、音読し、文法に関するややこしい理屈を聞いてかくというなんとも退屈なものでした。別に中学のときの英語を悪者に行っているわけではありません。ただ、そのややこしい理屈をストレートに伝えすぎているだけ、いっていることは正しいのであてはめれば解決はできるんです。つまり、その理屈を伝える前に中西先生が行っているように、まず文に出てくる単語を説明し、実際に皆で、あるいは一人で文の訳をすることにより、あらかじめの学ぶべき内容をはあくすることが大切だと思うのです。理屈を学ぶのは後でもかまわない。まずは自分でやってみる。そしてその内容の重要ポイントを自分で確かめる。このほかにも、ダス先生と会話するときに、思いもよらない質問が出たとき、答え方がわからずただおろおろとするのではなく、なんとか自分の考えを理解してもらおうと考え、工夫しながら答えるのも大切なことだと思います。以上のことが私の思う、英語の変化した質です。ただ単に私の思っていたことをぶちまけた作文になりましたが、この1年の英語で学んだことは、英語の新しい学び方と、それによって手に入れた英語の技術です。

「先に教えておいたほうが、のちのち生徒は困らないだろう」とどうしてもあらかじめすべて教え込んでおきたくなるのは教員の性です。でも、すべてを教えることはやさしさではないのです。この生徒がかいているように「まずは自分でやってみる」機会を与え「自分で理屈を気付かせる」ことも大事な教員の仕事です。そうやって自分でみつけた理屈は、きっといつまでも忘れないでしょう。

もうひとつ、教科書の和訳マラソンに取り組んでいて、記号付けプリントのやり方や英語の単語の並べ方のパターンを見抜きはじめ、1枚のプリントを仕上げる速度がどんどん速くなってきたある生徒が、振り返りシートに残してくれた、うれしいコメントを紹介します。

なんかちょっと英語の物語というか内容を理解できるのが楽しいような気がしてきました。ちょっと英語の物語の本をよんでみたいかも

生徒にこう思わせたら、ほとんど教員の仕事は終わりなのではないでしょうか。「機」を見逃さずキャッチし、絶妙のタイミングで「靴をおとす」。これが教員の仕事でしょう。次の授業ではこの生徒に「このくらいの英文ならよめるよ」と英文の本をわたそうと思います。

ただ、工業高校の生徒に、「このタスクをやれば英語の力がついて勉強が楽しくなるよ」という前ふりだけで活動中心の授業を導入してもきつとうまくいかないでしょう。今まで学校の勉強でいい思いをしたことがないし、卒業後も進学する気がない生徒たちです。「こんなことして何になるんよ?」という不平が飛び交うのは当然です。最近、活動型授業のお手本を授業達人の先生が見せる管制研修が多いです。確かに、見事な手法で感心しきりですが、同じことを自分の学校でやろうと思えないのは、この「こんなことして何になるんよ?」という生徒の声が聞こえてきそうだからです。どうやって生徒たちにやる必然性をもたせているか、今度聞いてみたいです。活動型授業の授業達人の先生方のようなオーラや自信のない私には、「やったら30点、やらなかったら不合格」という「逃げ場なくし」は必ず必要です。もちろん、それは「強制」です。その強制が強制のまま終われば問題ですが、卒業時に利害関係がなくても学び続ける生徒に向かうために必要な強制ととらえれば問題はありません。

今年度後半からこのマラソン方式の活動中心スタイルに切り替えてから大きな発見がありました。それは、クラス全員の学びの課題が手に取るようにわかってきたということです。この活動型の授業では、本当に一人ひとりの取り組みはさまざまです。後で楽しようと、どんどん課題を進める生徒。山田昇司先生の報告にあったように「必然のある協同学習」が自然と発生し、何人かで頭をつき合わせて課題に取り組む生徒。わからないのに、誰にも聞けず動けないままじっとしている生徒。講義式授業では見えない、ひとりひとりの学び方や、だれが学びに入れていて、だれが入れていないのかが、よく見えます。さらに出来上がったプリントをチェックすることで、「この生徒は、センマルセンがまだよくわかってないんだな」とか「ヒントを探す目の力がよわいんだな」など一人ひとりのつまづきが、明らかになります。さらに、生徒一人ひとりと目を合わせる時間が格段に増え、生徒との関係も深まります。以前、授業の悩みを相談させてもらったとき、寺島先生から「中西さんは、寺島メソッド＝マラソン方式と誤解していないか?」と注意をうけたことがありました。また「クラスサイズにより、マラソン方式がうまくいかない場合もある」とアドバイスもいただきました。もちろんゆくゆくは、たとえば、全体やグループで表現読みを深めるようなスタイルも取り入れていきたいのですが、今のところ、私は、生徒の学習がよく把握でき、一人ひとりの生徒とかかわるチャンスが増えるマラソン方式はしばらく手放せないと思っています。

10. 最後に

私が職場を離れ、和歌山大学の大学院に内地留学していたとき、ある大学の先生に「大学の先生が、それ以前の学校教育に生徒に最低限身に着けておいてほしいことは何か？」と聞いたときの答えは「せめて、勉強するというのを嫌いにならないでいてほしい」でした。

人間が、意欲をもって学びつづけるために必要なことは3つあると思います。1つは、知的好奇心があること。2つは、自分の成長が常に実感できること。そして3つ目は自分のやっていることがほかの人に伝わり、リアクションがあること。

「すべての指導はやめるためにある」。寺島メソッドの大きなテーマであるこのことばが、最近私の頭の中をずっとぐるぐると回っています。いつどのように記号をなくしていくのか。単語のヒントをいつどのようになくしていくのか。そして、成績をつけるという脅しをいつどのように放棄していけば、高校卒業時に、「学ぶことに意欲を感じ、自ら学び続ける市民になった」と安心して生徒の手が離せるのか。

外から与える学習評価も、いつかは、生徒たちが強力な外的動機付けがなくても自律的に学び続けられるようにするためにあるものです。その観点が欠落している中では、パフォーマンス評価をとりいれようが、ルーブリック評価をとりいれようが、主体的で対話的で深い学びなど絵に書いたもちです。評点をつける目的が、人材の選別をしやすいように生徒に値付けをするためだけであるかぎり、採点基準と採点方法が変わるだけです。

結びに、生徒の作文をもうひとつ紹介したいと思います。

今年は英語が少しわかるようになった。マラソンとか先生といっしょにといたらわかるようになった。英語はすごく難しいけれどみんなや先生やダスとかとやったらだいたいわかってくるし、一人でもとけるようになってきた。中学のときや1年のときは何にもできなかったけど2年になってからはいろいろわかるようになったし、知ってる歌の日本語でわかってから面白くなった。今まで普通に英語で聞いていた歌が、授業で勉強したらぜんぜんちがうく聞こえるようになった。この1年で英語のとらえかたが変わったし、来年も英語の先生が、中西先生がいいと思った。この1年、2年で英語のことがこんなにもわかったのは自分でもびっくりした。だから来年もう一年したらもっとわかるんちがうか？と思うしもっとわかるようになるといいと思います。テストがんばる。

この生徒は、スポーツ推薦で入学してきた生徒で、かなり学力は低いです。実はいまでもアルファベットがややこしかったりします。しかし、そんな彼が、超苦手でもまったくお手上げ状態だった英語が、記号付けプリントや、教員やクラスメートの支援で、すこしずつわかるようになっていく。自信をとりもどしていく。もっと学びたいと欲がでてくる。

自分の学びをふりかえったとき、「わかるようになった」「一人でもできるようになった」と肯定的な自己評価ができ、意欲をもって前にすすんでいける学習に導けるようどう支援していくか。勝手に決めた到達点から見下ろして、ルーブリックの表を作ったり、can

do list を作って仕事をした気になる前に、教員がすべきことは、いくらでもあると思います。

冒頭で、書かせてもらったように、今の私の授業が、すべての生徒を真の学びにつなげられているわけではありません。今日（3月15日）今年度最後の授業をしてきたのですが、年度末の成績が出た後の授業で、しかも来年度私が続けて持つかどうかも確実ではないという状況（つまり、今プリントをやるのが、来年の成績につながらないかもしれないということです）で、私が用意したマラソンプリントに取り組む生徒は、クラスの半分弱でした。最終目標である、成績や進級など関係なしに、自分の興味だけで学びつづけられる生徒の育成は、まだまだ道半ばです。

課題のあたえ方、プリントの作り方、声かけのタイミングや仕方、生徒をうけとめる度量、よく観察し生徒の「機」を見逃さず瞬時に支援する力、まだまだまだまだ身につけるべき力は残っていて、乗り越えるべき壁は高いです。しかし、なぜか今は楽観できるのです。「すべての生徒は学びたがっている」「すべての支援（指導）はやめるためにある」「身につけるべきはすべての学力に転移する見えない力」「評価の最終目標は言葉による自己評価」。「枝」とらわれず「幹」を見失わない限り、今日に映っている状態が、最終形態であるかのようにみえて落胆するのではなく、永遠に改善途上にあるものの一場面に見えて、立ち向かう勇気が出てくるのです。高校英語教員としてできることは本当に限られていますが、出会った生徒たちを少しでもいいように変えられる教員をこれからも目指し続けていきたいです。

補記

来年度の年間授業計画のたたき台

学年	1年	2年	3年
1ターム	歌 We will rock you 書写、和訳マラソン、 リズム読みテスト 暗唱テスト The big turnip 和訳マラソン リズム読みテスト、 暗記テスト	教科書和訳マラソン	教科書和訳マラソン
2ターム	歌（曲目未定） There is a hole 書写、和訳マラソン、 リズム読みテスト	歌（曲目未定） 書写、和訳マラソン、 リズム読みテスト、 暗唱テスト	歌 Imagine 書写、和訳、リズム 読み、アメリカ手話 暗記テスト

	<p>暗記テスト</p> <p>The house that Jack built</p> <p>書写、和訳マラソン、リズム読みテスト</p> <p>暗記テスト</p>		<p>民衆の歌</p> <p>書写、和訳、リズム読み、暗唱テスト</p> <p>ミゼラブル鑑賞</p>
3ターム	<p>教科書和訳マラソン</p> <p>余裕があれば歌も</p>	<p>教科書和訳マラソン</p> <p>余裕があれば歌も</p>	<p>映画の1シーン（未定）を使った</p> <p>書写、和訳、リズム読み、表現よみ</p>
4ターム	<p>教科書和訳マラソン</p> <p>余裕があれば歌や映画の1シーンも</p>	<p>映画の1シーン（未定）を使った</p> <p>書写、和訳、リズム読み、表現よみ</p>	<p>I have a dream</p> <p>書写、和訳、リズム読み、構造読み、表現よみ</p>
5ターム	<p>（未定）誰かのスピーチを使った書写、和訳、リズム読み、構造読み、表現よみ</p> <p>（候補 世界一貧しい大統領ムヒカ）</p>	<p>I have a dream</p> <p>書写、和訳、リズム読み、構造読み、表現よみ</p>	<p>The Great Dictator</p> <p>のスピーチ</p> <p>書写、和訳、リズム読み、構造読み、表現よみ</p>